

く大正デモクラシーと労働者く

前回紹介された山陽鉄道とともに、高砂の近代化を象徴するのが、三菱製紙および鐘ヶ淵紡績であろう。三菱の高砂進出は一九〇一年、鐘紡が一九〇八年、以来両工場ではたらく労働者の住居および彼らを顧客とする商店や歓楽施設が建設され、地域社会は大きく変貌していった。

今回はそれよりあと、大正デモクラシーといわれる時代の労働者について、簡単に紹介しておきたい。さて、図は日本毛織加古川・印南両工場の労働組合、誠和会の機関紙に掲載されたマンガである。工場側は労働者にたいする疑心暗鬼ゆえ、製品などの盗みだしを恐れて彼らにオーバーの着用をゆるさない。いっぽう職員はオーバーに身をつつんで喫煙しながらゆうゆうと出勤しており、そのわきで守衛が労働者を「オイ」「コラ」呼ばわりしている。職員と労働者とのあいだに、ある種の身分的差別がしかれていた当時、どこの工場でも日常よくみられた光景であろう。

同時にこの図は、労働者がそのような差別を時代遅れの不当なもの、と意識するようになっていたことを示している。背景にはデモクラシーや社会主義の思潮の影響があり、当時の労働運動は待遇改善とともに、人間としての平等をめざす運動でもあった。

同じ一九二五年、三菱製紙高砂工場の工友会が、解雇者の復職などを求め、ストライキに突入している。誠和会と工友会は、その後も東播地方の民衆運動の中心となつてゆく。

（高砂市史編さん専門委員
三輪泰史）

